小中学生における心理社会的学校環境と自覚症状との関連性の構造化

○高倉実[1)]，小林稔[2)]，宮城政也[3)]，小橋川久光[2)]，和氣則江[1)]，岸本梢[4)]
[1)] 琉球大学医学部，[2)] 琉球大学教育学部，[3)] 沖縄県立看護大学，[4)] 琉球大学大学院保健学研究科

Keywords：構成概念，構造方程式モデリング，ヘルスプロモーティングスクール

【目的】

近年，児童生徒を取り巻く学校環境の中でも心理社会的環境に対する認知の重要性が強調され，支援的・受容的な学校環境は生徒の保健行動や主観的健康，well-being の発達の資源となり，一方，非支援的・ネガティブな学校環境はこれらの危険因子となることが指摘されている。

心理社会的学校環境には学校適応などの多くの類似した概念が内在して含まれているが，先行研究のほとんどはそれぞれの概念と健康結果との独立した関連性を検討しており，これらの概念間の関係性や因果性を考慮して健康結果への影響性について検討した研究報告はほとんどみられない。その中で WHO による Health Behaviour in School-aged Children Study（HBSC）は，学校環境における心理社会的特性間に相互関連性を仮定して健康結果への影響性を評価する概念モデルを提案している。この仮説モデルでは，児童生徒の自律性，学業要求，級友サポート，先生サポート，両親サポートから構築される学校環境概念が，学校満足や学業成績，学校関連ストレスで代表される学校適応概念に影響し，さらに，主観的健康や保健行動などの健康結果に影響を及ぼすというパスを仮定している。しかしながら，欧米のいくつかの研究はこのモデルを採用しているものの，構成概念妥当性について数量的に十分な実証がなされているわけではなく，この概念モデルにはまだ改善の余地が残されている。加えて，欧米でデザインされ実施されている HBSC の尺度項目を，学校制度や文化の異なるわが国でそのまま使用することにも疑問が残る。これまで本邦では，高校生を対象として HBSC 尺度の一部について一次元性や安定性が確認されているが，小･中学生における本概念モデルの使用可能性についてはまだ検討されていない。

本研究では，小･中学生について，HBSC 心理社会的学校環境概念モデルの因子的構成概念妥当性の評価を行い，同時に，概念間の因果構造や自覚症状との関連性を検討することを目的とした。

【方法】

沖縄県の 23 公立小学校の第 6 学年に在籍する児童 1,428 名および 14 公立中学校の第 1 学年に在籍する生徒 2,069 名を対象として質問紙調査を実施した。分析項目すべてに欠損値がない小学生 1,127 名（男子 49.6%，女子 50.4%），中学生 1,197 名（男子 48.9%名，女子 51.1%）を分析対象とした。調査項目は 1997/98 年 HBSC 調査票で使用されたもので，自覚症状は頭痛，腹痛，腰痛，抑うつ，不機嫌，神経質，睡眠困難，めまいの 8 項目から評定し，心理社会的学校環境は生徒自律性（5 項目），学業要求（2 項目），級友サポート（3 項目），先生サポート（3 項目），両親サポート（3 項目），学校満足（4 項目），学業成績，学校関連ストレスから測定した。分析は，HBSC 原版の心理社会的学校環境尺度の因子的構成概念を検討するために，探索的因子分析および検証的因子分析を実施した。また，構成概念間の因果構造モデルを検証するために多重指標モデルの因果構造分析を行った。構造方程式モデリングには Amos 5 を使用した。

【結果及び考察】

探索的因子分析の結果，先生サポート，級友サポート，両親サポート，学校満足，学業要求，規則の 6 因子が抽出された。そのうち，級友サポート，両親サポート，学業要求，学校満足を構成する項目は HBSC 原版の尺度項目にほぼ対応していた。HBSC 原版の生徒自律性尺度は先生サポート因子と規則因子に分離して抽出された。自覚症状項目を因子分析したところ 1 因子が抽出された。探索的因子分析結果に基づき，学校環境概念および学校適応概念の 2 次因子モデルについて検証的因子分析を行った。両モデルの適合度指標は容認基準を超えており，パス係数はいずれも高い値を示したことから，各因子の一次元性が確認された。多重指標モデルを用いて各概念間の因果構造を検討したところ，学校満足因子，学業成績，学校関連ストレスを独立させて配置したモデルが採用された（図）。このモデルでは，先生サポート，級友サポート，両親サポート，学業要求，規則から構成される学校環境概念についてポジティブな認知を示す生徒は，学校に対する満足度が高くなり，その結果，自覚症状の訴えが少なくなるという因果構造が示唆された。しかし，学業成績から自覚症状へのパスおよび学校環境から学校関連ストレスへのパスはきわめて弱く有意ではない値を示した。学校関連ストレスは他の因子と独立して自覚症状に直接影響していると考えられる。学年･性別について多母集団同時分析を行った結果，パス係数をフリーパラメータとしたモデルが採用された。したがって各集団の因果構造は変わらないが，モデル解釈の際には，学年･性別を考慮する必要があろう。

結論として，一部の尺度に若干の改変がみられたが，HBSC 心理社会的学校環境概念モデルは因子的構成概念妥当性を有することが確認された。また，学校環境－学校満足－自覚症状のパスモデルが健康結果を説明することが示唆された。

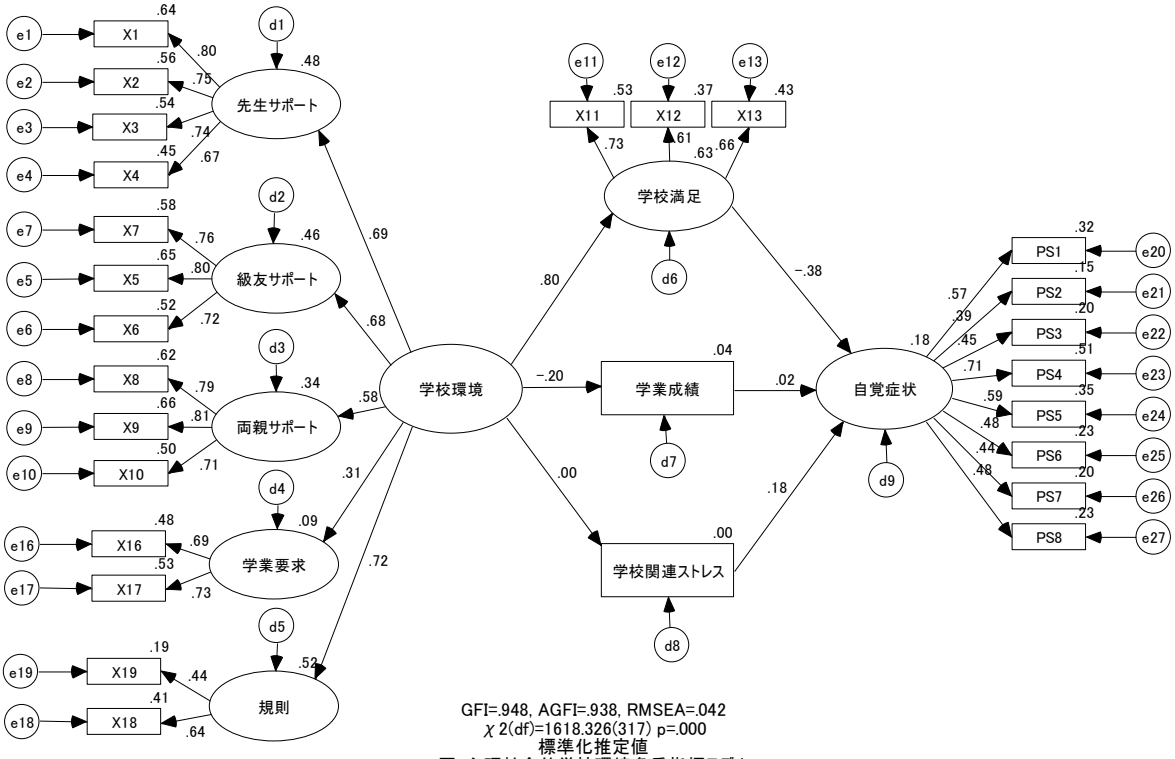

図. 心理社会的学校環境多重指標モデル